

そう答えて、よそ者はパンをかじった。

「翼も爪も嘴も持たないが、わたしたちの国を救ったオンドリを知っている」

「本当に長い話のようだな」

イブラヒムはほっとしてよそ者に言った。

「コーヒー、もう一杯飲むかね？」

第3楽章



フォルテピアノ 強く、ただちに弱く

少年は森を駆けた。悪魔に追われているかのよう。どうせ追われるなら悪魔の方がいい。なにかという杖を振りあげる父親に比べたら、悪魔の方がはるかにましだからだ。しかしこの日も運命は願いを叶えてくれなかった。

父親は今回、数日かけてじっくり力をためた。だからセリムはいつもより森の奥深くへ入っていかざるをえなかった。もう三十分ほど木立のあいだを走っている。わざと斜面を選んだ。そうすれば若くて体力のある自分の方が有利だからだ。追ってくる父親がようやく遅れた。呪いの言葉がしだいに遠くから聞こえるようになり、セリムに希望が芽生えた。もうしばらく走ってから、肩で息をしながら倒木に腰かけた。

喜ぶいわれはないのに、セリムはかすかに笑いだした。父親の暴君ぶりを目の当たりにしたあとでは、どんな自由でも大事に思える。幾度か荒い息をつく、脈が落ち着いた。目を閉じて、今回はうまくやれたと胸を撫でおろした。そのうち森の匂いとざわめきが体に染み

込み、魂を包んだ。

人の営みが作りだす喧噪が届かないこの山の中では、森の交響樂が細やかに聞こえてくる。そよ風が木立を抜けてささやく。空に向かって伸びる無数の枝がかさかさと言をたてる。目を覚ました猫が伸びをするように、空気の中に生気がみなぎる。すぐそばの柔らかな苔のクッションに松ぼっくりがぼとりと落ちる。セリムの足下の地面は一見、なにも動いていないように見えるが、虫たちのかさかさこそそういう音が草の下や地中からきこえていた。そこには密かにうがたれた巨大な迷宮があり、本来目に見えるはずの無数の虫の営みを覆い隠していた。そこから遠く離れた頭上の枝では、一匹のリスがなにかかじっている。

去年の冬、セリムは耳をすましさえすれば、身のまわりの世界のすみずみまで探れるということにはじめて気づいた。あらゆる命の機微に触れ、命の交響樂が深遠なる神秘を開示した。溶けかけた雪の上を歩くと、落ち葉を踏みしだくのとちがう音がする。凍てつく大地に折り重なった雪の結晶は、日を浴びて溶けかけた雪よりも澄んだ音がする。

父の声も、冬場にはかすれた音に変わる。おそらく寒さで声帯の張りがなくなり、振動が変化するからだろう。戸をノックしたときの音も、冬場にはちがって聞こえる。はじめてそ

のことに気づいたとき、セリムは家をまちがえたかと思った。

どうやら音の調べには二種類あるらしい。だれにでも聞こえるものと、長調とも短調ともいえず、したがって温かい感じも、冷たい感じもしないもの。それでいて、後者の調べは音に質感をもたらし、生気を与え、息づかせる。ところが多くの音色の中にあるこの第二の調べは、だれにでも聞こえるものではないし、いつでも存在しているわけではなかった。だからセリムがそのことを話すと、父親はその反証として頬を張り、あの密やかで繊細な音とはまったく無縁なお粗末このうえない音を響かせた。セリムは二重に失望したが、そのことではかえって意地でも第二の音の調べに耳を傾ける気になった。

その甲斐あって、セリムは森にすわると、けたたましいヒバリのさえずりを耳にした。語る暇も惜しいとでもいうように気ぜわしく、あわただしく、目まぐるしい。嘴から絞りだすように、あるいは木の上から吐き捨てるようにさまざまな音を奏でている。そんなに必死にさえずっているのに、なぜか自分の居場所を変えようとしないう。すると唐突にさえずる声途絶え、短い間を置いてまた聞こえた。今度は心なしかゆつくりになったが、強さは増していた。そこには嫌な音色も驚きあわてる響きもなかった。調べはおなじなのに、今度はこの世に生を受けた喜びに舞いあがっているかのように聞こえる。セリムは理由をたしかめるこ

とにした。ここにあの密やかな調べを知っている存在がいる。おなじ調べでふたつのまったく異なる物語が語れる存在。

セリムは腰を上げ、自分の仲間とおぼしき存在の方へおそるおそる進んだ。一步一步ゆつくり森の地面を踏む。その不思議なヒバリを脅かさないために。だから鳥のさえずりがセリムの耳元で聞こえるようになるまでしばらくかかった。今度のそのさえずりに、別な音色が加わった。音から音へなめらかに移行する。父親の冬場の声帯とは無縁な音。眉間にしわを寄せてこの底に流れる音色に意識を集中させたとき、セリムはうつかり枝を踏んでしまった。ばきつと音がするなり、さえずりが消えた。双方から発する深い静寂が森を覆った。セリムはあわててて息を止めた。相手は小鳥のはずなのに、セリムは全身が脈打つを感じた。大げさかもしれないが、ヒバリは少年の心に途方もない使命を託そうとしているように思えてならなかった。

「だれだね？」ヒバリが訊ねた。

第4 楽章



モデラート 中くらいの速さで

「セリム」よそ者はそう名乗って、コーヒーを飲み干し、カップをゆっくり机に置いた。「わたしはセリム」

イブラヒムは話の虜になり、しばらくぼんやりセリムを見つめてから、いれたてのコーヒーを注ぎ足した。「わたしはイブラヒム。おまえさんを助けることができてよかった」

「こちらこそ感謝しなくては」セリムは手を横に振った。「泊めてもらったことだけでなく」「夜中にうなされていたな」

「それ以前の体験と比べたら、アラアの歓喜の庭を散策するようなものです」とセリムは陽気に言った。ようやくこの土地らしい物言いをするだけの気力を取りもどしたようだ。こうした粹な言いまわしが、この土地ではもてなされる側ともてなす側に不思議な調和をもたらす。しかし彼の言葉は、甘やかな言葉の綾だけでなく、苦い真実も含んでいた。

「わたしは相当うなされていたでしょう」とセリム。「それでもわたしにとっては、ひさし